政大日本研究【第九號】
2012 年 1 月，頁 105~128

日俄戰爭期間日本帝國對樺太殖民地化的視線：論志賀重昂的地理學知識

楊素霞*

摘要

對近代日本而言，樺太是處在日俄兩國政治角力中，國境無法明確的區域。但是日本在日俄戰爭中取得勝利後，北緯 50 度以南的樺太就成為日本的殖民地。當日本帝國欲了解擁有上述背景的樺太之際，與國境設定有關的地理學知識就變得不可或缺。地理學者--志賀重昂受到東京地學協會及軍方的委託，前往樺太進行考察。故此，作為論述日本帝國對樺太殖民地化的視線之一方法，本稿旨在分析志賀在樺太當地的考察中如何形成其對樺太的認識。

在考察中，志賀克服當地交通不便的困難，使用既有的道路或船隻，讓其足跡遍及全島。又，他運用地理學知識，勾勒出具有實踐性與政策性的殖民地經營論點。該論點的內容為，為了達成該島財源自主的目標，主張主要發展以移民為前提的農業，同時在漁閑或農閑時也著手進行林業與礦業的開發。

志賀的考察可說是內含帝國主義思想的社會意識的產物。特別是在被視為帝國主義戰爭的日俄戰爭之當下，在考察期間獲得公家機關援助的志賀，毫不避諱地展現其帝國主義式的想法。另一方面，此次的考察亦是一面投射樺太現況的鏡子，向同時代的人們提供認識樺太時的方法與框架。

關鍵詞：日俄戰爭，志賀重昂，地理學，殖民地化

* 南臺科技大學應用日語系 助理教授。

The Colonization of Karahuto in the Eyes of the Japanese Empire During the Russo-Japanese War: On the Geographical Knowledge of Shiga Shigetaka

Yang Su Hsia*

Abstract

To modern Japan, Karahuto was placed between the political struggle of Japan and Russia, a region without clear national boundary. However, when Japan won the Russo-Japanese War, the Karahuto south of 50'N now became her colony. Once the Japanese empire intended to understand the Karahuto with such a background, the geographical knowledge related to the definition of the national boundary became indispensable. Entrusted by the Tokyo Geographical Society and the military authorities, the geographer Shiga Shigetaka went to Karahuto for research. This paper therefore aims at analyzing how Shiga established his knowledge on Karahuto through fieldwork, and thus to understand the perspective of the Japanese empire towards the colonization of Karahuto.

During his fieldwork, Shiga overcame difficulties in local transportation, using the existing land and sea transports, leaving his trails over the whole island. Moreover, he used geographical knowledge to outline a practicable and policy-making thesis of colonization project. The main content of this thesis advocates the development of a migration-based form of agriculture. Forestry and mining can be undertaken during the recess seasons in fishing and farming. All these projects aim at achieving the island's fiscal independence.

The investigation of Shiga can be regarded as the product of social consciousness of the day with imperialistic thinking. In particular, Shiga received research grants from the public authorities, conducted research during the Russo-Japanese War, which was already seen as an imperial war, and he directly expressed his imperialistic thinking. On the other hand, this investigation was a mirror reflecting the circumstance of Karahuto, a methodology and framework for the contemporaries to understand Karahuto.

Keywords: Russo-Japanese War period, Shiga Shigetaka, geography, colonization

* Assistant Professor of Applied Japanese Department, Southern Taiwan University of Technology.

日露戦争期における日本帝国の樺太植民地化への眼差し—志賀重昂の地理学知識を通して

楊素霞*

要　旨

近代日本にとって、樺太は日露両国間における政治力学の中で国境の不確定な地域であった。しかし、日露戦争の勝利により北緯50度以南の樺太は日本の植民地となった。この樺太という地域を日本帝国が認識する際に、国境の設定と関連する地理学が欠かせないものであった。地理学者・志賀重昂は、東京地学協会や軍により同島での踏査の任務を与えられた。そこで、本論では日露戦争期の日本帝国が樺太植民地化へ如何なる眼差しを向けていたのかを明確にするには、一つの手掛かりとして、志賀が樺太視察を通して如何なる樺太認識を有していたのかを分析することを目指している。

彼は、交通不便な困難を克服して既成の道路や船便を用い、全島に足を運んだ。また、彼は、地理学的知識を以て、財源的自主を目指すために移民を前提とした農業主体の開発、そして林業と鉱業で漁閑・農閑期を埋め合わせるという、実践的・政策的な植民地経営論を作成した。

このような視察は、当時の帝国主義的な社会意識の中で生まれたものであった。とりわけ、帝国主義戦争であった日露戦争という時期において、彼は公的機関からの援助を受けつつ、帝国主義的な思考を露骨に現すことさえあった。それと同時に、この視察は、樺太の姿を写し出す鏡として同時代の樺太認識の一つの方法的枠組を提供するものであった。

キーワード：日露戦争、志賀重昂、地理学、植民地化

* 南台科技大学応用日本語学科 助理教授。

日露戦争期における日本帝国の樺太植民地化への眼差し—志賀重昂の地理学知識を通して

楊 素霞*

1. はじめに

近代日本にとって、主権の及ぶ範囲を確認すること、すなわち、国境の画定は避けて通れない課題であり、日露戦争期における樺太（現・サハリン）[1]はまさしくそのような主権の明確さを急ぐ地域であった。

樺太は、現在の北海道や千島列島がかつてそうであったのと同様に、江戸時代当初においては未だ領土として認識されず、異域とみなされる地域であった。1780 年代以降、ロシアの千島列島南下に伴い、江戸幕府や後の明治政府は樺太の領土化に努力を重ねてきた。江戸幕府は、1809（文化 6）年に樺太を幕府の直轄下に置くこととしたが、1855（安政元）年の日露和親条約によって樺太は旧来通りの雑居地とされた。明治政府は、1875（明治 8）年の樺太・千島交換条約によって、千島の日本への譲渡を交換条件として樺太をロシアへ譲渡することとした。その後、樺太が日本の領土となるには、日露戦争を待たなくてはならなかった。日露戦争の勝利により 1905（明治 38）年 7 月 31 日に樺太は日本軍に占領されることになり、同年 11 月に北緯 50 度以南（南樺太）は正式に植民地として日本領になったのである。

要するに、樺太の境界線は、常に日本とロシアとの間における政

---

* 南台科技大学応用日本語学科助理教授。本稿は、2011 年 10 月 21 日に文藻外語学院の日本語学科が主催した 2011 年国際学術シンポジウム（テーマ：「高等教育を取り巻く環境変化と日本語教育」）で行った発表に、修正を加えたものである。なお、この研究は台湾の行政院国家科学委員会の研究助成金（計画番号 NSC98-2410-H-218-028-MY2）によって行われたものである。

[1] サハリンはロシア名称であり、日本側の名称は樺太であるが、本稿では日本名称である樺太で統一する。なお、島内の地名は、志賀重昂の用語に従い、原則としてロシア名称を用いる。

治力学という外因によって流動的なものにならざるを得なかった、というわけだが、日露戦争における日本の樺太占領は、日本人にとって、樺太・千島交換条約によって喪失した領土の「回復」[2]という意味も持っていた。このような史的経緯の中で、日露戦争期における日本帝国が、ロシアとの紛争によって勝ち取った植民地樺太をどのように見ていたのかを考察することは、少なからず有意義なものだと言えるだろう。

本論では地理学者・志賀重昂を研究対象にする。そもそも地理学は近代国家の内外への欲望と密接な関係を持つ近代的な学問であり、その上で主権国家としてのバウンダリーの確定には、地理学による測量が不可欠であった。しかも、エドワード・W・サイードが「地理をめぐる闘争が複雑かつ興味深いのは、それが兵士や大砲だけでなく思想と形式とイメージとイメージ創造をともなうからである」と論じている[3]ように、地理学的分析から地理をめぐる思想の形成とイメージ作りを明らかにすることができる。実際、志賀は1905（明治38）年半ば、東京地学協会の主幹兼大日本水産会幹事として、樺太の地質と水産を研究するために、樺太に向かって出発し[4]、翌年6月より同年10月までの約三ヶ月間、樺太境界画定委員を務めている[5]。

以下、本論の目的は、日露戦争期の日本帝国が樺太植民地化へ如何なる眼差しを向けていたのかを明確にするには、一つの手掛かりとして、志賀が樺太視察を通して如何なる樺太認識を有していたのかを分析することである。

志賀に関する先行研究は、大きく四つに分けられる。一つ目は、

---

[2] 例えば、1904年8月20日に参謀次長長岡外史少将が、総理大臣に対して樺太作戦を建言した中で、「日本海をわれに確保せんがためには是非ともこれ（樺太—引用者）を回復せざるべからず。」（谷寿夫、1996：306）と述べ、樺太の「回復」の重要性を唱えている。民間では東京の博文館が1905年8月15日に出版した『樺太回復紀念帖』が最も代表的な例だと言える。

[3] エドワード・W・サイード著、大橋洋一訳（1998.12：38）。

[4] 志賀重昂（1909.11：695-709）。

[5] 志賀重昂（1909.11：987-1050）。

『南洋時事』を対象とした南進論との関わりである[6]。彼は 1886（明治 19）年に海軍練習艦・筑波に便乗して対馬に渡り南洋をめぐった。翌年、『南洋時事』を発表して以来、「南進論」者としてよく知られるようになっていた。二つ目は彼の政論・国粋主義との関わりである[7]。彼は 1888（明治 21）年に三宅雪嶺などと共に欧化政策に反対して、政教社の設立及び『日本人』と言う雑誌の発刊を行い、国粋主義を説いている。三つ目は南進論、国粋主義や地理学を含む彼の思想の全体像についてである[8]。最後は地理学との関わりである[9]。特に最後の二種類の諸研究の中では、志賀の着目した地域として南洋、朝鮮や中国が取り上げられることはあるものの、彼の樺太視察に関する研究は欠落していると言ってよい状況にある。

なお、本論では、志賀が著した『大役小志』を主な史料とし、彼のその他の文章を適宜、補足参照することとする。同書は、彼が日露戦争中、軍と同行し、中国東北部、樺太や韓国などの戦地を実地踏査した日記であり、彼の樺太認識を考察する上では恰好の史料だと思われる。なお、テキストは、東京の東京堂、1909 年 11 月刊行本を用い、以下、同書を引用する際には、煩雑さを避けるため、引用文直後に頁数を付するのみとした。予めお断りしておきたい。

2. 志賀重昂の地理学と北方への関心の原点

志賀の地理学がどのようなものであったのかについては、先行研究によって既に指摘されている。そのため、ここではそれら先行研究に基づき、彼の地理学的性格を簡略にまとめるにとどめておきた

---

[6] 矢野暢（1979.8）、清水元（1991.9＆1991.10）、水野守（2001.3）、亀井秀雄（2003.3）。

[7] 本山幸彦（1958）、松田道雄（1959）。

[8] 岩井忠熊（1960.10＆1961.7＆1962.6）。これらの論文は、のち、同氏の著作・『明治国家主義思想史研究』（1972）に収録されている。

[9] 佐藤能丸（1973）・（1998.11）、源昌久（1975）。また、漢詩文を基盤とした独特の文学性が地理学と融合した、志賀の著作である『日本風景論』（1894）に関する研究も若干存在する。例えば、山本教彦・上田誉志美（1997.6）、大室幹雄（2003.1）などである。

い。

志賀が地理学の研究を始めたのは、『南洋時事』著述の機縁となった 1886（明治 19）年の最初の南洋渡航だったといわれている[10]。彼の地理学の思想的な本源は、欧米列強の帝国主義を原則とする国際社会にあって、日本国家・民族をいかにして発展させるか、そして日本国を如何に位置付けるかというところにあった。それは、各国独自の国粋を基礎に各国の分業が成立する可能性が生じることを主旨とした国粋主義と、ある程度共通している。彼の地理学は、そのような国粋主義を前提として、自らの海外体験、そして欧米の地理学を吸収することによって形成されたものであった。このような地理学は、国粋主義思想の鼓吹と普及、及び帝国主義の推進を目的の一つともしていた。その目的を達成するために、彼は大衆に対して啓蒙的姿勢を終始崩すことがなかった[11]。

なお、志賀は、地理学を研究する以前から、北方に対して関心を持っていなかったというわけではなかった。1880 年から 84 年までの間、札幌農学校で勉学に従事した経験は、むしろ彼の北方への関心の原点であった。『南洋時事』は 1887（明治 20）年に出版されて以来、ベストセラーになり増刷を重ねていた。その中、1891（明治 24）年の増補訂正 4 版の付録には「第一章　北海道を如何に開拓して最も多く利益を見る可き乎」という一章が特別に加筆されている。それは、志賀が、札幌滞在以来、北海道開拓に対する関心を絶やさなかったことをよく物語っている。

また、彼は、日露戦争中の 1905（明治 38）年 3 月、東京で行われた北海道学生大会で、「植民的生活」をテーマとした講演を行っている。その中で、戦争中の従軍経験から、戦後、樺太や満州での「植民的生活（コロニアル・ライフ）」に、騎馬、露営、健康や困窮に耐

[10] 志賀富士男編（1929：153）、岩井忠熊（1962.6：36）。

[11] 前述の志賀の地理学については、源昌久（1975：200）、佐藤能丸（1973：73）を参照した。なお、志賀の地理学は「国粋主義地理学」と佐藤能丸氏によって定義付けられている。

えうる気力などといった要素の養成の重要性を喚起している。その重要性は札幌で生活してきた実体験に基づくものであったと回想し、それを以て「北海道に人と為りたる少壮学生の如きは、先づ卒先して此の気風を養成せられんことを望む。」と聴講学生を激励している[12]。

志賀の地理学の研究は、札幌農学校時代の勉学と基本的には関係がなかったが、上記のように、彼が札幌農学校時代から示していた北方へ関心に、地理学の知識が加えられることによって、1905（明治 38）年の地理学的な樺太探検が実現するに至ったのである。

3. 志賀重昂の樺太での踏査活動

日露戦争期において志賀重昂が樺太を視察したのは都合二度に渡っている。一度目は 1905（明治 38）年 8 月 23 日より同年 10 月 25 日まで、東京地学協会の主幹兼大日本水産会幹事として、同島の地質と水産を研究するためであった。二度目は、1906（明治 39）年 6 月 12 日より同年 10 月 15 日まで、樺太境界画定委員として国境の画定という役目を日本政府によって付与されたためであった。二回目の視察は志賀を含めて計 14 名（後述）の共同行動であり、彼の言動は公的な制約が加えられたものであった。そのため、ここでは一度目の視察に限定して検証することとする。

3.1. 志賀重昂と公との関わり

志賀重昂は、1905（明治 38）年 7 月 19 日、陸軍省に視察許可の申請を提出し[13]、翌月 20 日に東宮から派遣された田内三吉工兵大佐、民政署長官・熊谷喜一郎をはじめとした同署官吏らと共に樺太に向

[12] 「植民的生活（上）＆（下）」『小樽新聞』（1905.3.11-12）。それらは志賀重昂（1909.11：525-529）にも収録されている。

[13] 志賀重昂、「地質及水産研究の為樺太全島視察の件」（1905.7.19）、アジア歴史資料センター、レファレンスコード C03026629400。

かって出発した[14]。しかし、当時、同年 7 月 31 日に日本軍が樺太全島を制圧するも、翌月 23 日に民政署の開設と共に民政が施行されるには至らなかった。樺太への自由渡航も開始されなかった。自由渡航は、同年 8 月 7 日、陸軍省が公布した「樺太島出入船舶及渡航者規則」（陸軍省告示第 16 号）によって初めて決定されることになったのである[15]。

このような状況の中で、一般の民間人が自由に樺太へ赴くことは到底不可能であったわけだが、このことから見ても、彼の樺太行きが、軍をはじめとした公的機関と関わっていたことが分かる。『大役小志』には彼と公的機関との交流ぶりが随所に記されている。例えば、彼が北樺太のツィム川流域の密林を探検した際には、ロシア兵からの攻撃防止を目的として、樺太守備隊から 5 名の護衛兵が、随行員として派遣されている[16]。

志賀と軍などとの公的関係については、そもそも日露戦争中、彼が従軍できた理由には、農商務省山林局長や外務省勅任参事官などを歴任した経歴の他に、西園寺公望のコネがあったからという事情もあった。一方、明治政府が彼を大戦の記録者としてその有用性を認めていたことも間違いはない。加えて、帝国の国土拡張に際して行われる測量・地図作成への軍部の関与、及び東京地学協会の存在をぬきにしてこの問題を語ることはできない。

これについては、前述した、1906（明治 39）年 6 月より同年 10 月までにおける彼の樺太境界画定委員としての樺太視察から考察を始めたい。前年 1905（明治 38）年 9 月に日露両国は、日露講和条約・ポーツマス条約により北緯 50 度を分岐点に樺太を分領することを決めた。バウンダリーの確定のために、日本政府は、翌年に樺太境界画定委員を計 14 名選出した。その内訳は、参謀本部の外局・陸地測量部の技師を含む陸軍関係者 11 名、海軍関係者 1 名、帝国大学教

[14] 志賀重昂（1909.11：695）頁。
[15] 東亜同文会編纂局編・鈴木陽之助校（1905.9：付録 57-58）。
[16] 志賀重昂（1909.11：800-802）。

授 1 名及び志賀という構成であった[17]。軍関係者が半数以上を占めていたのである。日本帝国は国土の拡張において水路・陸地測量や海図・地図の作成を欠かさず、それらの作業は陸・海軍によって担われることがしばしばあった[18]。志賀は、1874（明治 7）年、海軍大学校教授・近藤真琴の経営する、航海と陸地測量習練所を併設した私塾・攻玉社に入ったことがあり、それによって軍との個人的なつながりができるようになったと考えられる。

その上、志賀が入会した東京地学協会（Tokyo Geographical Society）は、1879（明治 12）年 4 月に榎本武揚などがイギリスの王立地理協会（Royal Geographical Society）をモデルとして設立した組織であった。同会は設立初期において海・陸軍関係者が会員数のほぼ三分の一を占め、同会の広報活動を通した地理的学知の普及において軍部や軍人が果たした役割は小さくなかった[19]。したがって、志賀は、彼の軍との個人的な交流や東京地学協会を通して、樺太現地調査で軍から公的な便宜を大いに得たのである。

3.2. 視察路線と交通手段

ここで歴史地理学の手法で本論の第 106-107 頁の地図を参照しつつ志賀の視察経路と交通手段について確認しておきたい。一回目の視察の経路は以下の通りである[20]。

---

[17] その委員長は陸軍砲兵大佐大島健一である。委員は志賀のほか、陸軍砲兵中佐渡辺岩之助、海軍大尉和田勇二、陸軍歩兵大尉畑英太郎、陸軍一等軍医北島庚吉、陸軍二等軍医大槻式二、陸軍一等主計水津武之進、陸軍教授樋口艶之助、東京帝国大学助教授平山清次、陸地測量師矢島守一・中紫栄三郎・山田竹彦・中寿摧である（大島健一、「大嶋大佐外 13 名拝謁之件」1906.12.3、アジア歴史資料センター、レファレンスコード C03027390100）。この樺太境界画定委員の人数はほかに二説があるが、これについては今後の課題としたい。なお、樺太境界画定については、陸軍省編（1910.6）、志賀重昂（1907.4）に詳しい。

[18] 山室信一（2006.10：22-33）。

[19] 同会に関しては、石田龍次郎（1969.3）（この論文は後に 1984 年に東京の大明堂が出版した同氏による『日本における近代地理学の成立』に収録されている）、安岡昭男（1999）。なお、当会のホームページ：http://www.geog.or.jp/。

[20] 筆者が志賀重昂（1909.11：693-709、798-816）を参照して作成した。

1905 年 8 月 23 日、アレクサンドロフスク→9 月 1 日、沿海州→9 月 2 日、アレクサンドロフスク→9 月 16 日～10 月 4 日、ツィム川一帯→10 月 5～7 日、ルイコフ、オノルまで南下、ルイコフ→10 月 8～11 日、アレクサンドロフスク→10 月 13～14 日、コルサコフ→10 月 15 日、マウカ→10 月 16～17 日、クスンナイのほか、マウカなどノトロ半島沿岸→10 月 18～25 日、コルサコフ

志賀の樺太探検は、まず、アレクサンドロフスクから始まり、間宮海峡を渡って沿海州へ到着、そして樺太に戻ってツィム川を下り北樺太を横断し、さらに南下して南樺太一周を回る、というものであった。彼の視察範囲は点々としたものでありながらも全島にまで及んだ。

彼がアレクサンドロフスクを起点としたのは、1905（明治 38）年 9 月の日本の北樺太放棄まで民政署の本署がアレクサンドロフスクに置かれていたからであり、それにより、より容易に公的な援助を受けられるようになった。アレクサンドロフスクは、ロシア統治時代において全島の行政を管轄する樺太島長官[21]の官庁所在地で、そこを起点としてルイコフやオノルなどの内陸部を経て南部のコルサコフまで道路が貫通していた。その道路は、ロシアが行政の便宜上、アレクサンドロフスク州、ツイモフ州とコルサコフ州の三地方行政区画の首府であるアレクサンドロフスク、ルイコフとコルサコフを連結するために開通した唯一の幹線であった[22]。したがって、彼は既成の道路を用いてアレクサンドロフスク、ルイコフやオノルへの

[21] 樺太はアムール沿道総督の管轄に属したが、全島の行政を統括したのは樺太島長官だった。

[22] 当時、樺太で陸路が発達しなかった理由は、山林や未開拓地が頗る多く冬季は氷結のため雪上橇の方がより便利だったということもある。なお、樺太の鉄道は 1906 年 6 月に日本が軍需運送用に計画して同年 12 月にコルサコフ—ウラジミロフカ間の軽便鉄道を開業させるまで待たなくてはならなかった。

踏査を実行できた。

北樺太行きの中で、志賀は、特に約二週間をかけて密林にもぐりつつツィム川を探査した。この川に志賀が焦点を絞ったのは、「ツィム渓谷は北樺太の生命を作つて」おり、「土地肥沃」で「一般に樹木密生し、沼地とては少い。此の如き灌域なるが上に、鱒鮭の多きこと樺太第一なるより、露国が開拓の主力を此の灌域に用ひたるも偶然ではない。」と認識した[23]からである。それと同時に、この川にめぐまれて、ルイコフは「露人が樺太開拓の中心市場」（703 頁）となったと述べている。その反面、「明治八年、一度樺太が露人の掌中に入りてより、露人は此川の漁業を禁止し、又た日本人の此川を溯上せし者もなく、（後略）」という理由から、ツィム川は日本人にあまり知られていなかった[24]。

それから、日本の北樺太放棄により、志賀一行はアレクサンドロフスクを引き揚げざるを得ず、1905（明治 38）年 10 月中葉に引き揚げ作業が開始された。次いで、志賀は、考察の重点を南樺太、とりわけコルサコフやマウカなどの場所に移した。コルサコフは同年 9 月に北樺太放棄以来、民政署の所在地となり、コルサコフの面するアニワ湾は日本人の鰊の漁業活動区域であった。マウカは、「樺太の西岸に位し、全島唯一の不凍海岸にして、又た鰊集合の衝点に当る、故に古来日本人の漁業根拠地となる」（706 頁）と述べている。実際にマウカのある南部西海岸は、港湾や段丘の沈降でできた谷を利用した小入江があるため、漁船の出入りにやさしい地域であった。日本人は以前から漁船で移動し、盛んに鰊、昆布などの水産業に従事してきた（後述）。ただし、南樺太の沿岸は各場所を貫く鉄道や道路がなく段丘地形による制約も加えられていたため、志賀らは船便を用いざるを得なかった。

---

[23] 志賀重昂（1909.11：798-799）。

[24] 志賀重昂（1909.11：799）。なお、最初はこの地域において日本人の漁業活動の範囲は河口一帯のみだった。1902 年以降、ロシア人しか漁業の人夫として雇われないことになったため、日本人の漁業活動は絶えてしまった（東亜同文会編纂局編、1905.9：123-124）。

樺太視察の中で特異とも言うべき探検は、1905（明治 38）年 9 月 1 日の沿海州行きだと言えよう。樺太が日本に占領された後、在留ロシア人の沿海州への引揚は、民政署の重要な職務の一つとなった。志賀は、ロシアの引揚者を乗せた輸送船に便乗して、アレクサンドロフスクから沿海州のデカストリ湾へ向かった。デカストリ湾は、当時、樺太から沿海州へ海底電線がつながる唯一の場所であった。皮肉なことに彼がアレクサンドロフスクに帰着した同月 2 日は、樺太を北緯 50 度の線で折半するポーツマス講和条約の内容が公表された日であった。

4. 踏査活動から見た樺太像

4.1. 産業開発論

志賀は上記の踏査活動から如何なる樺太像を描いたのであろうか。まず、『大役小志』に収録されている「樺太の経営[25]」という文章に基づき、彼の樺太風土をもとにした産業開発論、及び植民地としてどのような未来図を描いていたのかを明らかにしていきたい。

志賀の描く樺太経営のアウトラインは、「樺太の経営は、樺太より収入する所を以て始末するてふ方針に出でざるべからず」（830 頁）というものであった。その理由については、次のように述べられている。

> …我が財政に極めて余裕なき今日、一方には韓国を経営して保護国の実を挙げしめ、更に満州をも経営して日露開戦前後の目的を到達せんには、今日の国力にては如何と思ふ許りの費用を要するを如何すべきぞ。…（830 頁）

すなわち、彼は、韓国保護国の経営や、南満州鉄道とそれに付属する利権の経営など日露戦後の膨大な財政負担の中で、国からの補

[25] 志賀重昂（1909.11：829-849）。

助に先立って、樺太の地自らより財源を捻出せざるを得ず、また後述するように、そうすることが得策だと主張したのである。ちなみに、樺太から得られる収入について、諸産業の中で彼が取り上げたのは漁業、それに次いで林業であり、なおかつ将来開発有望な産業として挙げたのは鉱山、農業と牧畜であった。

漁業に関しては、「樺太に魚類の豊富なるは、同島近海が世界の豊魚帯の内にあるのみならず、其の事実は世人の十二分に知る所（後略）」（831 頁）とし、またその漁獲状況については、「毎年三月より六月まで鱈漁あり、四月より七月上旬まで鰊、鰈漁あり、七月より八月まで鱒漁あり、八月より九月まで昆布の採取あり、九月より十月まで鮭漁あり、十月より年を超えて翌春まで鱈漁あり。」（834 頁）と述べている。

さらに「三十八年十月二十四日結了しゝ樺太民政署の漁区競争高にても五十余万円に達せり、（後略）」（831 頁）と言っている。これは、具体的に言うと、日本人が江戸時代より既にアニワ湾だけでなく東と西海岸にも進出し、鰊をはじめ鮭、鱒や昆布などの水産業に取り組んでおり[26]、そのため漁獲の豊富な事実は日本人にはある程度で知られていたということ、そして、1905（明治 38）年 10 月にロシア人の経営する 108 箇所の漁場が競争入札によって処分される際に、入札出願者は六百名余、落札額も 50 万円近くにのぼった[27]、ということを示している。

一方、「南部樺太に於ける在来の漁獲高は戦前に当り一ヶ年平均二十万石、此価二百万円ありき、（中略）南部樺太が愈々日本領となり、日本人が大手を振ひつ漁業に従事し得る今日となりては、一ヶ年三十万石、此価三百万円位を収入すべきは然まで難事にあらず。」（832

[26] 日本人の樺太での水産業活動に関しては、樺太定置漁業水産組合編（1931.7：17-135）を参照のこと。

[27] 樺太定置漁業水産組合編（1931.7：141-142）。なお、樺太での漁場の処置については、1905 年 8 月 7 日に陸軍省が公布した「樺太漁業仮規則」（陸軍省告示第 15 号）により、1903 年までの漁場の権利が保障され、漁業権は競争入札によって与えられることになった。

頁）と、志賀は、膨大な一年平均漁獲高の現状を見て樺太の漁獲量に楽観的な予測を下していた。日露戦前において漁業の最盛期に達した 1903（明治 36）年の漁獲高に限って見ると、日本人の場合は 109,434.697 石、ロシア人の場合は 117,133.362 石で、合計で 226,568.059 石であった[28]。そこから分かるように、志賀の述べた一年間の平均漁獲高は、実際には、日露両国の漁獲高の合計数であった。それはともかく、志賀は、戦後、大半の漁場は、日本人の手によって経営されることを予想し、そのため漁業収入を楽観視していたのである。

林業の場合は、志賀は、森林が南樺太の半分ほど占めていることから、海外輸出のみならず、現地の建築、船舶、雪橇、枕木などにも用いられるとして、林業の将来性を高く見積もっていた[29]。

また、将来開発有望な産業として、志賀は、樺太を開発するために石炭の鉱山が不可欠だと説いた。さらに、旅中、キュウリ、キャベツ・ジャガイモなど亜寒帯の野菜、及び小麦とエンバクといった穀類が生産されており、牛・馬の飼育も一般化していることに気づいた[30]。ただし、彼は、穀類の生産や牛・馬の飼育は改善すべき余地が大きく残されていると考えた。前者については、土地の開墾・耕耘や施肥などを一切行っていないというロシア人の耕作方法を批判した上で、「土地の開墾に力を用ひ、相当に耕耘し、打捨てある厩糞を肥料に用ひ、種も今少しく良種を選み、又た散播キを廃して少しく播キ方に注意すれば、麦の収穫は増加すべく」と提言した[31]。後者については、ロシア人が飼育している牛馬の品種を、「退化」したものと見て、北海道種を輸入することを呼びかけた[32]。

そこから、農業と牧畜に相当な見込みがあるとして、「真正に且つ堅固に樺太を経営せんと期すれば、農業を奨励し、土着の移住民を

[28] 樺太民政署編（1907.3：74-76）。
[29] 志賀重昂（1909.11：836-840）。
[30] 志賀重昂（1909.11：841-844）。
[31] 志賀重昂（1909.11：843）。
[32] 志賀重昂（1909.11：843）。

一人にても多からしめ、以て永久の利益を図るにあり。」（845 頁）と言うように、定着民を得やすい農業拓殖を主体にすべきだと、彼は力説した[33]。さらに、彼の開発方針論は首府の所在地への意見をも左右した。「海岸にある港にして、輸出入の中心、水産物揚卸の中心たる」コルサコフより、「日本領樺太の農業平原」である「ススヤ川縦谷の中心」・ウラジミロフカが政治的中心となるべきだと、彼は考えたのである[34]。

このように、志賀の樺太開発構想は実地調査に基づいたものであった。彼は樺太の財源的自主を目標に収益豊かな漁業と林業の開発を呼びかけた。それと同時に、定着民を招致するために農業を主体にすべきだとし、林業と鉱業で漁閑・農閑期を埋め合わせようという総合的な樺太開発構想を示したのである。

4.2. 在留の人々について

ところで、志賀は、樺太踏査中、現地の人々をどのように見ていたのだろうか。在留日本人に関しては、軍関係の人を除いて、彼が『大役小役』で言及しているのは、漁業者小熊幸次郎に招待されたという事実のみであり[35]、それほど多くの紙幅をさいていない。しかし、それとは対照的に、彼が同書中、多く論及するのは、同島でより多く接した、ロシア人や現地の先住民のことであった。

彼が、その旅程中、敵国民である在留ロシア人と比較的多く接触したのは、ロシア人の沿海州への引揚の時であった。「『…我々（ロシア人－引用者）が引揚げて沿海州に渡航せんとすれば、俄かに風、雨、高波と有ゆる物を数日間授け玉ひたるなど、全く吾々の滅亡の

[33] 樺太の開発方針として、志賀のような農業拓殖主体論とは別に、樺太が江戸時代以来の出漁地であったことから、沿岸漁村主体で開発すべきだという漁業主体論が、日本の樺太領有以降、政府内部に対極的に存在していた。これについては、三木理史（1999：3、9）を参照のこと。

[34] 志賀重昂（1909.11：845）。なお、志賀と同じ意見は陸軍内にも存在した（三木理史、1999：10-11）。

[35] 志賀重昂（1909.11：810-811）。なお、小熊幸一郎に関しては、佐藤精編（1958.6）を参照のこと。

期が来たのである』と、嘆息し居る」（761 頁）といったように戦敗国民の哀れな姿とは対照的に、日本の北樺太放棄決定後、「居残れる露人を見ると、前日の愁の色に引き代へ得々の色を現はして来た、予が許に毎朝来る牛乳配達の露人すら至極横柄となつた。」（766 頁）とのように彼らの日本への態度の豹変ぶりを、志賀は認識するようになった[36]。その反面、政治的権力を以てロシア人を追い出し彼らの生活基盤を奪おうとする日本人の横暴ぶり[37]に関しては、『大役小志』には何も記されていない。

一方、志賀は、ツィム川一帯を探検した際に、現地の先住民・ギリヤーク人と接したことがある。ギリヤーク人の村落を訪れ、鮭・鹿の調理法や火の起こし方など彼らの生活技能に感服し、また彼らに道案内をしてもらうこともあった[38]。また反対に、ギリヤーク人を案内係にするために、死の脅迫を迫ることもあった[39]。志賀にとって樺太の産業開発の主体は日本人であって、絶対数の少ない先住民は単なる探検中に利用する道具にすぎなかったのである。そのような彼の先住民への認識は、異民族への好奇心や蔑視を混ぜた、オリエンタリズム的他者像の域を出るものではなかった。

5. おわりに

以上、論じてきたように、南進論者として名高い志賀重昂は、日露戦争中、明治政府の上層部に寄りそうな位置にあって、準公的組織である東京地学協会や、軍などの正規の公的機関から視察の役目を与えられ、樺太での地理学的な視察を行った。当時、樺太は交通不便であったため、彼は既成の道路や船便を用いざるを得なかった。

---

36 志賀重昂（1909.11：751-767）。

37 三木理史（2006.5：37-39）。三木氏はセルゲイ・フェドルチューク著・板橋政樹訳（2004.5）を参考している。

38 志賀重昂（1909.11：803-816）。なお、樺太の先住民はギリヤーク（現・ニブフ）だけでなく、ギリヤーク人と共に北樺太を主な生活圏にしているオロッコ（現・ウィルタ）人もいる。一方、アイヌ人は南樺太を主な生活圏としている。

39 志賀重昂（1909.11：812-813）。

北樺太ではアレクサンドロフスクを中心にその付近及びツィム川流域、南樺太ではその沿岸一周を視察した。その視察範囲は点々としたものでありながらも、全島にまで及んだ。また、彼は豊富な地理学的知識を動員して、植民地樺太経営論を作成した。その論は、樺太の財源的自主を目指すために、内地からの移民を促進することで積極的に農業開発を実施し、その傍ら林業と鉱業を漁閑・農閑期に行おうという、極めて実践的・政策的な構想であった。

このような彼の樺太視察は、当時の帝国主義的な社会意識の中で生まれたものであった。とりわけ、帝国主義戦争という日露戦争中、彼は、樺太への出発から視察終了に至るまで、大いに公的機関からの援助を受けており、帝国主義的な思考を露骨に表面化させることもあった。それは、ギリヤーク人という異民族への好奇心や蔑視の眼差しからも分かる。他方、国粋主義、いわば日本の樺太経営が如何に帝国主義の国際社会と協調するのかということを、志賀はあまり念頭に置かなかった。むしろ、ひたすら日本の帝国主義的な国益を追求する姿勢がつよく見られる。

それと同時に、彼の樺太視察は、樺太の姿を写し出す鏡として同時代の樺太認識の一つの方法的枠組をも提供した。例えば、松永聴剣によって編集された『樺太及勘察加』（東京：博文館、1905 年 11 月）の「補遺」の「志賀矧川氏間宮林蔵東韃行程考」という文章には、『間宮林蔵東韃行程考』が収録されている。『大役小志』に収録されている志賀のツィム川での探検日記（798-811 頁）は、『地学雑誌』第 205 号（1906 年 1 月）に「ツイミ川」という論題で転載された。

ただし、志賀の樺太視察の経験が日本帝国の樺太認識の形成にどのような影響を与えたのか、検討の余地がなお残る。少なくとも彼の実体験談が地理学の学問的前線の東京地学協会の機関誌である『地学雑誌』に転載されたこと自体は、樺太の地理について調べようとする人なら、彼の文章を参考にする可能性は低くなかったことを意味すると考えられよう。

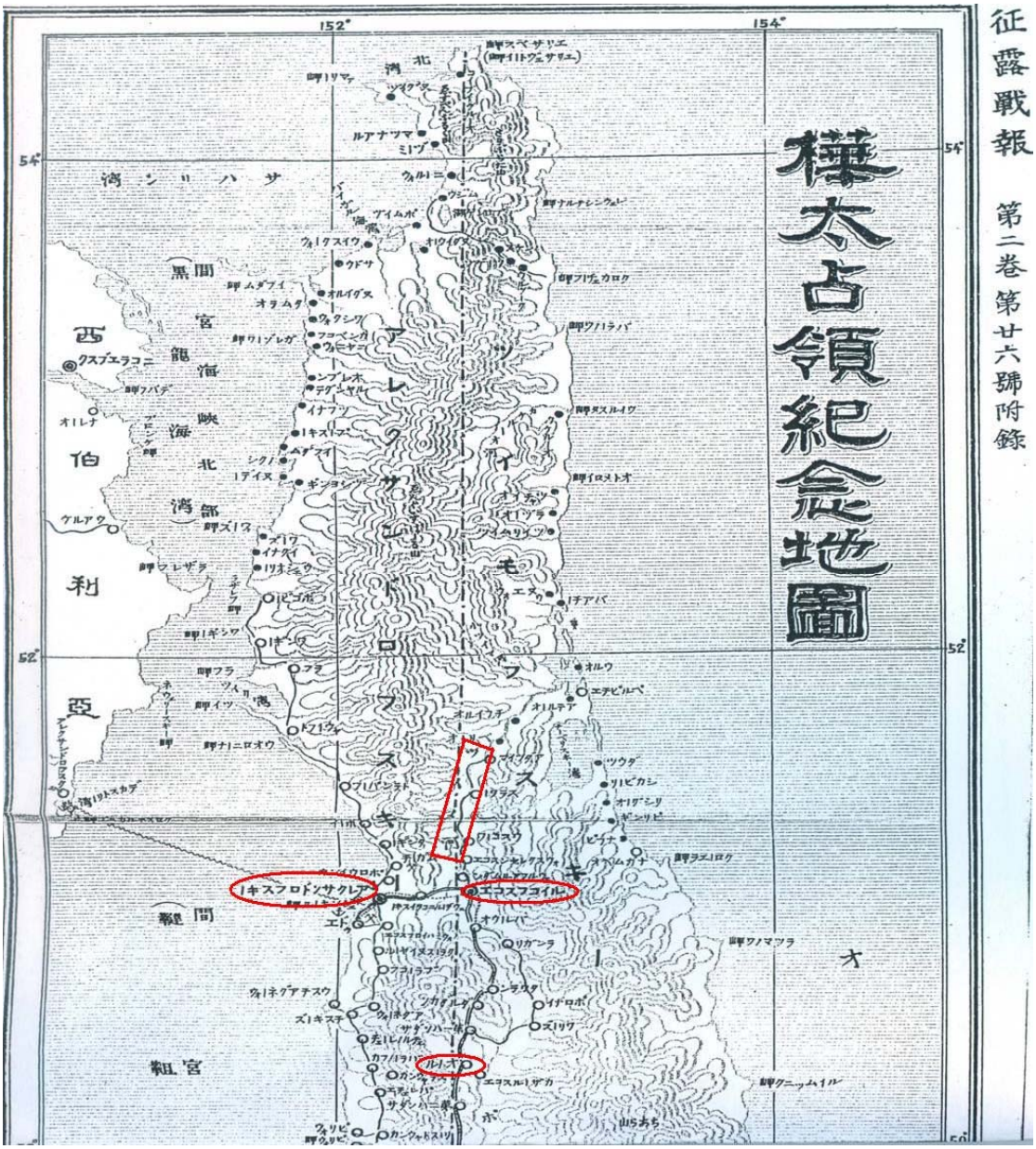
さらに、彼の樺太視察は、札幌農学校時代以来、持っていた北方への関心ともつながっていた。彼の樺太経営論の中には、前述したように、北海道種の牛馬の樺太への輸入という提言も見られるのだが、それに象徴されるように、北海道開拓への視線が、彼の樺太経営のあり方へも色濃く投影されていたのである。加えて注目されるのは、北海道と樺太の対比論が彼の議論の中でとりわけ特徴的であるという点である。前述したような彼の樺太首府論は、「恰かも北海道の拓殖を挙げんとするに当り、先づ府を札幌に建てたると同じく、（後略）」（855 頁）とあるように、石狩川流域にある札幌の首府に基づいたものである。さらに、資源がほぼ同じである北海道と樺太については、彼は次のように述べている。

> …北海道の遺利愈々薄らぐに従ひ、益々樺太に移り行くものにして、北海道余力の漸減と共に、樺太の開発漸加するは、実に其の順序なりとす。此くて今の樺太は第二の北海道となり、多利多福の方域と化成すること復た点疑だに容るべからず。…（848 頁）

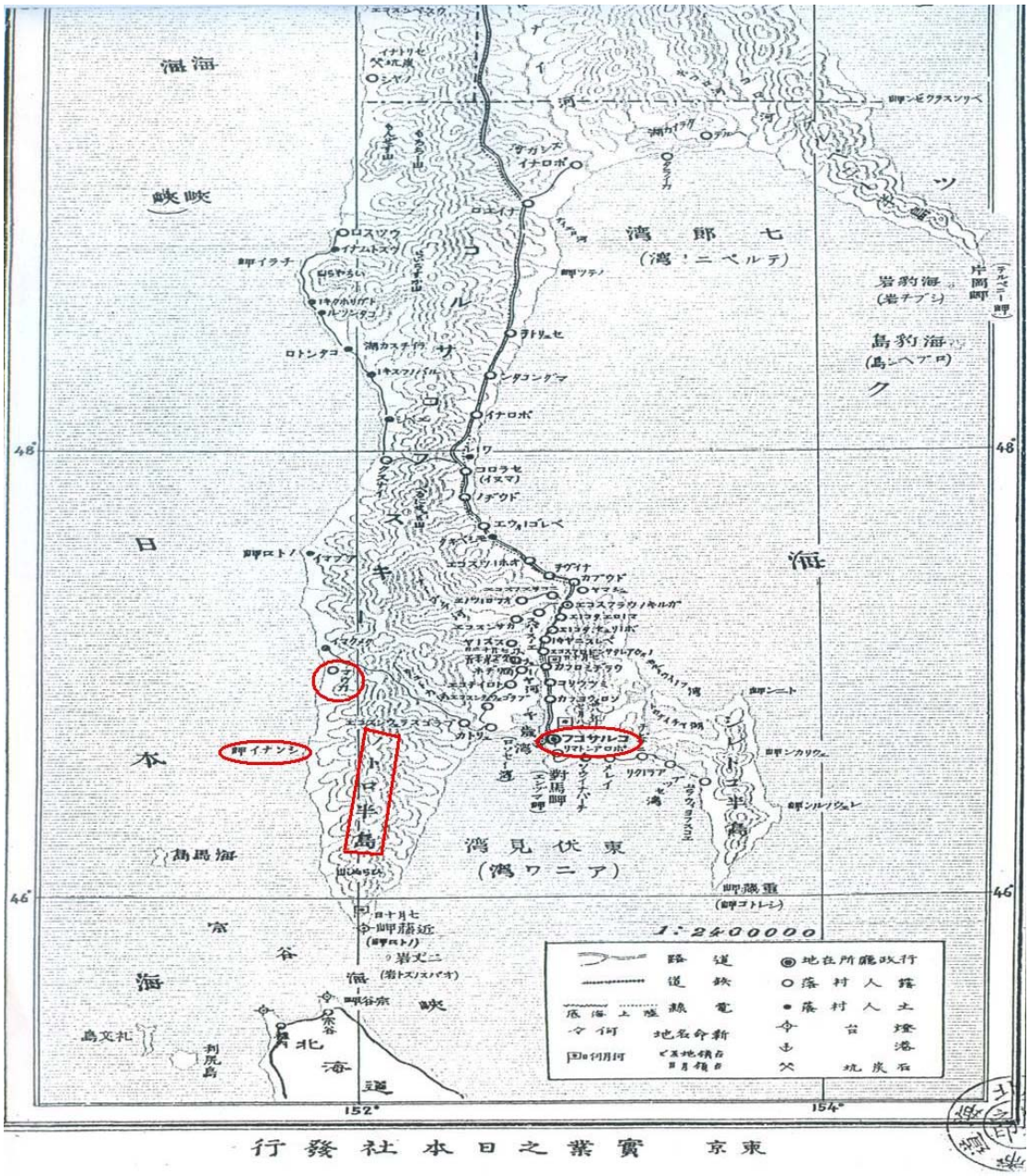
彼は、開発の順次は北海道より樺太を優先すべきとの考えを示した。すなわち、彼の樺太への眼差しは、札幌農学校時代に生じた北海道認識をさらに拡大させたものだったのである。

地図：「樺太占領記念地図」（東京：実業之日本社、1905 年 8 月）

北緯 50 度以北



北緯 50 度以南


海
峡
七郎湾
(湾ニベルテ)
岩豹海
(岩チプシ)
島豹海
(島ヘブロ)
日
本
海
ノトロ半島
東伏見湾
(湾ワニア)
宗谷海峡
北海道
1:2400000
152°
154°
46°
48°
東京 實業之日本社發行

参考文献

【論文】

石田龍次郎、「『東京地学協会報告』（明治一二～三〇年）—明治前半の日本地理学史資料として—」、『社会学研究　一橋大学研究年報』10 号、1969.3、1-83。

岩井忠熊、「志賀重昂(上)」、『立命館文学』第 186 号、1960.10、1309-1330 頁。

岩井忠熊、「志賀重昂(中)」、『立命館文学』第 194 号、1961.7、640-658 頁。

岩井忠熊、「志賀重昂(下)」、『立命館文学』第 198 号、1962.6、1003-1024 頁。

亀井秀雄、「『南洋時事』研究」、北海道大学百二十五年史編集室編『北大百二十五年史（論文、資料編）』、札幌、北海道大学、2003.3、54-110。

佐藤能丸、「国粋主義地理学の一考察—志賀重昂論—」、早稲田大学史学会『史観』86・87 冊、1973、71-85。

佐藤能丸、「志賀重昂—地理学の政治化—」、『明治ナショナリズムの研究—政教社の成立とその周辺—』、東京、芙蓉書房出版、1998.11、117-136。

志賀重昂、「樺太境界劃定の顛末」、東京地学協会編『地学雑誌』第 220 号、1907.4、213-221。

清水元、「明治中期の「南進論」と「環太平洋」構想の原型--志賀重昂『南洋時事』をめぐって-1-」、『アジア経済』第 32 巻第 9 号、1991.9、2-20。

清水元、「明治中期の「南進論」と「環太平洋」構想の原型--志賀重昂『南洋時事』をめぐって-2-」、『アジア経済』第 32 巻第 10 号、1991.10、27-44。

松田道雄、「日本の知識人」、加藤周一・久野収編『近代日本思想史講座　第四巻』、東京、筑摩書房、1959。

水野守、「志賀重昂「南洋」巡航と『南洋時事』のあいだ—世紀転換

期日本の「帝国意識」—」、『大阪大学　日本学報』、2001.3、89-112。
三木理史、「移住型植民地樺太と豊原の市街地形成」、『人文地理』第 51 巻第 3 号、1999、218-239。
源昌久、「志賀重昂の地理学—書誌学的調査—」、『Library and Information Science』No.13、1975、183-204。
本山幸彦、「明治二〇年代の政論に現われたナショナリズム」、坂田吉雄編『明治前期のナショナリズム』、東京、未来社、1958。
安岡昭男、「初期の東京地学協会と軍人」、『政治経済史学』第 400 号、1999、149-162。
山室信一、「第一章　国民帝国・日本の形成と空間知」、同氏責任編集『岩波講座「帝国」日本の学知　第 8 巻（空間形成と世界認識）』、東京、岩波書店、2006.10、1-76。

【図書】

石田龍次郎、『日本における近代地理学の成立』、東京、大明堂、1984。
岩井忠熊、『明治国家主義思想史研究』、東京、青木書店、1972。
エドワード・W・サイード著、大橋洋一訳、『文化と帝国 1』東京、みすず書房、1998.12。
大室幹雄、『志賀重昂『日本風景論』精読』、東京、岩波書店、2003.1。
樺太定置漁業水産組合編、『樺太と漁業』、豊原、樺太定置漁業水産組合、1931.7。
樺太民政署編、『樺太南部水産予察調査報告』、大泊、樺太民政署、1907.3。
佐藤精編、『小熊幸一郎伝』、函館、函館商工会議所、1958.6。
志賀重昂、『大役小志』、東京、博文館、1909.11。
志賀富士男編、『志賀重昂全集　第八巻』、東京、志賀重昂全集刊行会、1929。
セルゲイ・フェドルチューク著・板橋政樹訳、『樺太に生きたロシア人：国家と故郷のはざまで』、東京、ナウカ、2004.5。
谷寿夫、『明治百年史叢書　三　機密日露戦史』、東京、原書房、1996。

博文館編、『樺太回復紀念帖』(「日露戦写真画報」臨時増刊第 31 巻)、東京、博文館、1905.8.15。

東亜同文会編纂局編・鈴木陽之助校、『樺太及北沿海州』、東京、東亜同文会、1905.9。

三木理史、『国境の植民地・樺太』、東京、塙書房、2006.5。

矢野暢、『南進の系譜』、東京、中央公論社、1979.8。

山本教彦・上田誉志美、『風景の成立：志賀重昂と『日本風景論』』、大阪、海風社、1997.6。

陸軍省編、『樺太境界劃定事蹟』、東京、陸軍省、1910 年 6 月。

【その他】

「植民的生活（上）＆（下)」、『小樽新聞』、1905.3.11-12 日。

「樺太占領記念地図」、東京、実業之日本社、1905.8。

志賀重昂、「地質及水産研究の為樺太全島視察の件」、1905 年 7 月 19 日、アジア歴史資料センター（http://www.jacar.go.jp/DAS/meta/MetaOutServlet)、レファレンスコード C03026629400。

大島健一、「大嶋大佐外 13 名拝謁之件」、1906 年 12 月 3 日、アジア歴史資料センター、レファレンスコード C03027390100。

東京地学協会のホームページ：http://www.geog.or.jp/。